

主 題：すべてにまさるキリストと教会

聖書箇所：コロサイ人への手紙1章18－20節

テーマ：イエス・キリストが誰なのかを本当に知っていますか？

今朝、皆さんと続けて見ていきたいのはコロサイ人への手紙1章のみことばです。特に18－20節の部分をご一緒に考えてみたいと思います。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。

●頭とからだの関係：

今から遡ること6年前の2017年、ある手術が断念されました。幼い頃から病を患い、車椅子の生活を余儀なくされていたバレリー・スピリドノフという人物は、それを受けるための準備を進めてきましたが、直前になって受けないことを決めたのです。その手術とは世界初、生きた人の頭部移植手術でした。驚かれるかもしれませんが、この手術を担当する予定になっていた医師セルジオ・カナベロは、人類が抱える重い病気の問題を、頭部を移植することによって解決できると考えていました。彼は今も考えています。思い癌やからだの麻痺などを患った人がいた場合、別の健康な身体に頭部を移し替えることで、再び健康を取り戻すことができると主張していたのです。そして実際、スピリドノフさんの頭部を切り離して、ドナーとなるからだに付け替えることが計画されていましたが、最終的に術後に再び歩いたり、普通の生活に戻れること、少なくとも手術から生還することを医師が約束できなかったがために、この手術は取りやめになりました。生きた人の頭部を移植するという、信じられないような手術は断念されたのです。

さて、これを聞いて皆さんはどう思われたでしょう？おそらく、いやいやそれは不可能ではないですか？とか、そんなことを考えるなんてちょっとおかしいんじゃないの？と多くの人は考えたかもしれませんが、からだに結びついている頭を切り離して別のものに取り替えることなど、できるはずがないと思われたでしょう。確かに実際のからだの話をする場合、頭とからだを切り離すことなど到底できるものではないと信じていたりするのです。でも皆さん、もしこれが実際のからだではない場合はどうでしょう？もしこれが霊的な話の場合、もっと言えば、私たち信仰者、教会とイエス・キリストとの間の話であるなら、私たちはいったいどのようにそれを考えているでしょう？

私たちが今学んできているコロサイの教会は、まさにこの大きな問題に直面していました。これまでも触れてきたように、教会の中にせ教師たちが入り込んだために、いろいろな間違った教えが広まるようになり、それによって人々の間で混乱が起こっていました。そのうちの一つの深刻な問題が、このように2章で取り上げられていたのです。2：18、19を見ていただくと、その問題がこのように記されています。18節から「18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによつていらずに誇り、19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。」からだ全体の成長のためには、「かしら」に堅く結びついている必要があります。しかし、教会に入り込んでいた偽りの教師たちは、自分たちがそれに結びつこうとしないばかりか、別の何かにそれを置き換えようとしていたのです。彼らは教会から、まことのかしらであるキリストを取り除こうとしていました。キリストはすべてにおいて不十分な存在だと人々に教えて、別のものをかしらに据えようとしていたのです。でもその結果、当然深刻な問題が教会の中に生じることになりました。コロサイの兄弟姉妹たちは救いやみことばの教えに戸惑いを覚えたり、信仰の土台が揺るがされていたのです。からだが正しく頭に結びついていなければ、そのからだは成長していくことはできません。かしらであるイエス・キリストから切り離されては、信

仰者はだれも生きていくことなどできないのです。パウロはそんな教会が置かれている状況を正しく捉えていました。

だからこそ、同じ主を愛している兄弟姉妹たちが一番立ち返らないといけないその真理を、手紙の中で示そうとするのです。彼らが決して手放してはならないすべてにまさるイエス・キリスト、その偉大な姿に彼らの目を向けさせていたのです。そしてそれが、先々週に学んだ15節から、特にパウロによって描かれていたことでもありました。思い返す意味でも先に1:15-17を見てみてください。このようにイエス様について述べられていました。「:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」パウロはここで、御子がこの世界のすべてを造られた最高の権威者である、と教えていました。御子は、天にあるものも、地にあるものも、例外なくすべてのものを造られ、また今も変わらずにすべてのものを保っておられる主権者であると。そのように輝かしいイエス様の姿を描いていたのです。イエス・キリストこそ、すべてにまさって偉大な創造主なのだと言うわけです。こうしてその姿を人々に見せることによってパウロは、救いにおいても、信仰生活においても、この方だけが十分なお方のだ、この方だけがすべてなのだと言いたく人々に思い起こさせていました。

でも、もちろんそれですべてが終わったわけではありません。パウロは続けて、キリストの栄光にあふれた姿を信仰者たちに明らかにしていくのです。今度は創造ではなくて、教会に関連して、キリストがすべてにまさる最高位のお方であることを教えようとしていました。そのことが、きょう私たちが見る、続く18-20節の部分に記されています。この箇所から私たちは特に三つのものを見て取ることができます。並ぶもののない権威を持っておられるイエス・キリストの三つの姿です。ですから、そこにはっきりと示されている主の偉大さというものを再びよく考えてみましょう。またその中で、私たちにとって決して切り離すことのできないそのキリストがいったいどんなお方なのか、そして本当にこの方こそ自分にとってすべてなのだと言っているのかどうかを、ぜひ自分のこととして考えてください。これから見ていくこのみことばがひとりひとりにとっての主のすばらしさを改めて考える助けと励ましになることを祈っています。では、みことばをお読みしますので、18-20節をよく見てください。

コロサイ 1:18-20

「:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」

○すべてにまさるキリスト：権威ある主の三つの姿

1. キリストはからだである教会のかしら 18a

さて、一つ目に見て取れるキリストの権威ある姿が18節に記されていました。「また、御子はそのからだである教会のかしらです。」と。一つ目の権威ある主の姿、それは「キリストはからだである教会のかしら」ということです。この世界のすべてを造られた最高の力を持っておられるこのお方は、同時に教会の頭（あたま）なのだということです。これはいったいどういう意味でしょう？「御子はそのからだである教会のかしら」と言われるときに、パウロはいったい何を伝えようとしていたのでしょうか？そのことを正しく理解するために二つに分けて考えてみましょう。まずパウロはここで「からだである教会」と述べていました。この「教会」ということばを聞けば、もしかしたら多くの人は十字架の付いている建物や、クリスチャンが集まって礼拝する場所のことを思い浮かべるかもしれませんが、しかし、このこと

ばはそのようなものを指しているのではありません。ここで「教会」と訳されていることばには、もともと「エクレシア」というギリシャ語が用いられて、建物ではなく、「一般的な人々の集まりや群衆」といった意味を含んだものでした。またそれに加えて、こちらがより大切なのですが、このことばの語源には「呼び出す」とか「召し出す」といった意味があるのです。つまり、この二つの意味を合わせて考えてみるなら、「エクレシア」というのは建物のことではなくて、「召し出された人々の集まり」のこと、さらに言えば「救い主を信じる信仰によって、ただ神様の恵みによって、罪から救い出された者たちの集まり」のことを表していたのです。だからこそ、どの時代の人であろうと、どこの国籍やどんな文化の人であろうと関係はありません。イエス・キリストを信じる者はみな、同じ神様によって救い出され、一つの生きるからだに属する者へと変えられたのです。別のみことばもこのように述べていました。Iコリント12:13に「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」また、少し飛んで27節に「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」と書かれています。こうして救われた者はみな、同じキリストのからだに属する者へと新しく神様によって造り変えられました。同じキリストのうちにある集まり、教会となったのです。

そしてもう一つ、「御子は、そのような教会のかしらなのだ。」と書いていました。キリストは、そのような一つのからだに存在している頭なのだということです。皆さん、「頭」と聞けば、これが何を意味するのかはすぐに思い浮かべることができるでしょう。なぜなら私たちもみな、頭とからだを持っています。今見渡してみても、この中に「きょうは私、頭を家に置いてきました。」なんて言う人はいません。では、考えてみてください。そんな私たちのからだを見てみるときに、私たちにとって「頭」というのはどのような存在でしょう？もちろん言うまでもなく、からだにとって非常に大切な働き、なくてはならない役割を担っているものですね。特に、脳を考えてみても、私たちの脳は、物事を考えたり決めたりするような知的な働きをするだけではなくて、歩いたり走ったりするような運動をコントロールする働きも担っています。知的なことや運動だけではなくて、食べたものを消化したり、呼吸をしたり、心臓を動かしたりと、からだの成長、いや、いのちに関わる部分でさえコントロールする働きを担っているのです。だからこそ、私たちのからだからその頭を切り離してしまったら？それは言うまでもなく、私たちのからだは一切言うことがきかなくなるだけではなく、そもそも生きていくこと自体ができなくなるのです。

パウロがここで言わんとしていたこともまさにそのことでした。キリストはそのからだである教会の頭です。「この方こそ、そのからだに属するすべての人にとってのかしらです。」と言うのです。言い換えれば、教会のすべてを支配しておられるのも、その成長に欠かせないものもほかのだれでもない権威ある御子だ、ということです。かつてイエス様ご自身も、ペテロに対してこのように口にしておられました。マタイ16:18「ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」と。皆さん、いったいだれが教会を建てるのでしょう？それはイエス・キリストご自身でした。「わたしが教会を建てます。」と言われていたのです。いったいだれがその教会を所有しているのでしょうか？それもイエス様ご自身でした。「わたしがわたしの教会を建てます。」と言われていたのです。キリストこそが教会の建設者であり、教会の所有者でした。だからこそ、このようにも言うことができます。牧師や長老といった教会にいるリーダーたちがそれぞれの教会を勝手に建て上げていくのでも、彼らが個人的にそれを所有しているのでも決してない、ということです。私自身を含めて教会に与えられているリーダーというのは、主ご自身から託された大切な羊を導き養っているだけに過ぎません。そのことをパウロは、エペソの教会の長老たちとの別れに際して送ったことばの中でこう教えていました。使徒20:28「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたが

たを群れの監督にお立てになったのです。」と。教会は、神の教会でした。教会は、神様がその愛のゆえに自ら犠牲を払って買い取られたご自身のからだでした。そのからだの大牧者は、そのからだのためにいのちをささげられた御子イエス・キリストでした。救われた者はみな例外なく、私もあなたもこのかしらに属する者へとすでに変えられたのです。私たちはもうこの頭にくっついているからだに変えられたのです。

そうだとするならよく考えてみてください。果たして私たちは、本当に自分たちの頭がキリストなのだとして受け入れて、そしてそれにふさわしい歩みをしているのでしょうか？からだの一部分である私たちにとって、キリストに結びついているということが絶対に欠かすことができないものなのだ、と信じているのでしょうか？私たちはこのように日曜日とともに集まったり、水曜日の祈禱会に集まったり、それぞれの家庭集會に集まったりして一緒にみことばを学んでいます。ただ知識を増やすためにはありません。私たちのかしらである主が、聖書を通して変わらずに語ってくださっていることに耳を傾けて、その教えに喜んで従っていくためです。私たちの歩みにとっていつも十分に必要な知恵を与えてくださっているそのお方を心から愛しているからこそ、私たちは助けを祈り求めながら、主の栄光のためにみことばに従って行こうとするのです。でも果たして私たちは、頭が確かな指令を出していたとしても、そんなものは知らないとして無視して、自分勝手に歩んでいないのでしょうか？「からだは頭に必ず結びついていなければならない！」と口にはしていますが、実際はまるで頭から自分を切り離しているかのように歩んでいないのでしょうか？皆さん、忘れてはいけません。私たちの成長に必要な助けや力は、頭からやって来ます。かしらに結びついているということは、私たちにとってどちらでも良いことではありません。私たちにとって、この日はかしら結びつくがこの日はかしら結びつかない、などと選択できるものではありません。それに結びついていなければ、からだの一部分である私たちは決して生きていくことはできないということです。そうだとすれば、私たちはどんなときもそのすべての源であるお方に根ざして成長することを求めているのでしょうか？私たちはどれだけ主のみことばを求めているのでしょうか？かしらであるキリストとそのことばに従って、ますます密接に結びついていくことを願っているのでしょうか？それとも、何か別のものを勝手に頭に置き換えようとしていないのでしょうか？キリストはそのからだである教会のかしら、これが一つ目の主の権威ある姿でした。

2. キリストは死からよみがえられた第一のもの 18b節

次に二つ目に見て取れるキリストの権威ある姿が、18節の後半部分からこのように記されていました。「御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうしてご自身がすべてのことにおいて第一のものとなられたのです。」二つ目の権威ある主の姿、それは「キリストは死からよみがえられた第一のものだ」ということです。御子はすべての初めでした。教会のかしらであるお方は、教会の始まりでもありました。世界のすべてを思いのままに造られたお方は、教会をも造られた偉大な主でした。また何よりこの方は「死者の中から最初に生まれた方」でした。

さて、「最初に生まれた方」と聞いて、前々回一緒に学んだことを覚えておられるのでしょうか？ここには、15節に登場していたのと同じ「先に生まれた方」「初子」ということばが用いられていました。

「最初に生まれた方」それは、私たちが15節に見た「先に生まれた方」「初子」と同じでした。いったいどんな意味がこのことばにはあったのでしょうか？これは「後」とか「先」といった時系列を表すこともできましたが、それ以上に「先に生まれたものの持っている優れた権威や特権」を表すものでしたね。つまり、パウロがここで「御子は死者の中から最初に生まれた方です。」と言ったとき彼は、だれが最初に生まれたかといった話をしようとしていたのではなく、だれが一番優れた地位にあるのかを強調していたのです。皆さんが少し立ち止まってみればわかることかもしれません。

一つクイズです。ちょっと考えてみてください。聖書の中で、一番初めに死からよみがえった人はいったいだれだったでしょう？・・・答えは、預言者エリアのために小さなパン菓子を作って養った家の

名もない息子でした。その時の様子が I 列王記 17 章にこのように描かれていました。まず 17 節を見ると「これらのことがあって後、この家の主婦の息子が病気になった。その子の病気は非常に重くなり、ついに息を引き取った。」と。そして 22 節を見ると「主はエリアの願いを聞かれたので、子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った。」と書いていました。ということは、やはりイエス様は時系列的に死者の中から最初に生まれたお方ではありませんでした。パウロは時間的な順番の話をしていただけではないということです。そうではなくて、キリストこそ、死からよみがえったすべての者の中で最も優れた地位を占めておられること、この方こそ、すべてにまさる最高の存在であるということを表していたのです。そしてこれこそ私たちにとっても大きな希望でもありました。

先週、私たちはイースター礼拝を通して、キリストの復活が信仰者にとって欠かせないものである、ということ改めて考えました。キリストが十字架で死なれて、墓に葬られ、確かに三日目によみがえられたからこそ、この方を信じる私たちも今罪を赦され、同じようにいつの日かよみがえるのだと確信することができました。キリストが死と罪の力を打ち破って確かによみがえられたからこそ、私たちも死んで終わりではなく、永遠を勝利者である主とともに生きるのだと確信することができました。キリストの復活こそ、将来に対する私たちの揺るがない土台だったのです。そのことを先週私たちが見た I コリント 15 : 20 - 22 でパウロもこのように記していました。「:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。:21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。:22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」またイエス様ご自身もこのように弟子たちを励まされていました。ヨハネ 14 : 18 - 19 にはこうあります。「:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。」もし私たちの持っている希望が、私たちのうちや私たちの周りの何かに根ざすものであったとすれば、その土台はすぐに揺らいでしまったでしょう。もしキリストの復活がなければ、そもそもすべてのことが哀れなものでした。しかし感謝なことに、キリストは初穂としてよみがえり、今も変わらず生きておられるのです。私たちの永遠の希望は、復活されたその主にかかっているのです。この方において私たちは堅く立つことができるのです。キリストがよみがえられたからこそ、この方において罪の贖いが成し遂げられたのだと確信することができ、キリストが今も生きておられるからこそ、この方にすべてをゆだねて生きる人生が決して無駄にはならないのだと安心することができ、キリストが死とハデスの鍵を持っておられるそんなお方だからこそ、私たちはどんなときも恐れる必要もなければ、私たちのために天にたくわえられている望みや約束というものも、決して失われることはないのだと心から喜ぶことができるのです。イエス・キリストは 確かに死の力に勝利されました。この方こそ死者の中から最初に生まれたお方、すべてのもの、死にさえもまさる存在でした。そしてそんな偉大なお方だからこそ、18 節の最後でパウロはこう述べているのです。「こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。」ここでパウロが言わんとしていたことは明白でした。イエス・キリストはすべてのものの中で一番だ、ということです。ほかに並ぶものなど一切ない、最も高い地位を占めておられるお方だということです。すべてのものを造られて、支配されて、教会のかしらであるそのようなお方。何より十字架で死んでよみがえられた勝利者であるこのキリストは、今も、この先も、すべてを超えて第一となる存在でした。そして、このように偉大な一番であるお方は、当然私たちにとってもすべてとなるべき存在でした。あらゆるものから称賛され、あらゆるものから愛され、あらゆるものから最も仕えられるべき、それにのみ値する、栄光にあふれたお方でした。この方こそ、主の主、王の王だったのです。

でもその姿を覚えるときに、実際私たちはどうでしょうか？果たして私たちはこの偉大な主の姿を心に留めて、それを知っている者として生きているのでしょうか？私たちの人生において、本当にキリストこ

そがすべてでしょうか？それとも、大切なものがいくつかある中のそのうちの一つでしょうか？自分自身に問いかけてみてください。果たして私たちの歩みにおいて、いったいだれが第一となるものなのでしょう？いったい私たちは何を最も愛しているのでしょうか？私たち自身が何を一番大事にしているのか、私たちのうちで何が第一のものになっているのか、そのことをもし知りたく願うなら自分自身に問いかけてみることです。私たち自身がいったい何に一番時間を使って、何に一番犠牲を払って、何を一番に求めているかということです。それはキリストでしょうか？それともそれ以外の何かでしょうか？決して忘れてはいけません。すべてを造られた創造主であられ、すべてを変わらずに支配しておられる主権者であるお方。人にはどうすることもできなかった最大の敵を、死の力でさえも打ち破られたそのような勝利者、これこそが圧倒的な力を持ってすべてにまさる私たちの愛する主イエス・キリストの姿でした。こんなお方が私とともにいてくださるのなら、ほかの何を求めるのでしょうか？キリストは死からよみがえられた第一のもの、これが二つ目の主の権威ある姿でした。

さて、ここで少し立ち止まって考えてみてください。ここまで私たちは権威あるすべてにまさるキリストの姿を二つ見てきました。キリストは教会を支配しておられるかしらであって、またよみがえられたすべてのものの中で最も権威ある一番の存在であるということを考えてきました。この方こそ、造られたすべてのものの中で崇められるべき、最も高い地位を占めておられる存在でした。でもある人はこうしたみことばを見てきてこのように思うかもしれません。…どうしても私にはそうは思えないです。周りを見渡せば、変わらず悪が蔓延っています。病気や争いは絶え間なく生じているし、社会はますます神様に逆らうような選択をし続けている。キリストは最も権威ある存在だと言うけれども、この世界は全くそのように扱っていません。本当にこの方はすべてにまさるお方なのでしょうか？この状況が変わる日は来るのでしょうか？…どう思います？救われている者だけではなくて、すべてのものが跪いてキリストの前にふさわしいほめ歌をささげるそのような日が、本当にやって来るのでしょうか？

3. キリストは和解をもたらすすべての主 19-20節

その答えを残りの箇所は教えてくれていました。パウロは最後にもう一つキリストの権威ある姿を描いてくれていたのです。19節からみてください。「:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」最後三つ目の権威ある主の姿、それは「キリストは和解をもたらすすべての主だ」ということです。完全な神様であるこの御子は、壊れた関係を修復してくださるそのようなお方でした。お気づきになったかと思いますが、パウロはまたこの19節でも、キリストが紛れもない神様なのだ、ということに触れていました。「なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ」と。キリストに関して間違った教えが広まっていたコロサイの信仰者たちに対して、「御子のうちにこそ満ち満ちた神様の本質が宿っている」と伝えたのです。言い換えれば、この方のうちには神様としてのご性質や力、そのすべてが満ちているということです。欠けているところなど一切ありません。絶対に不十分な存在ではありません。父なる神様のうちに見てとれるものは、同じように御子のうちにも見て取ることができました。ですから、キリストは神様のようなお方ではありませんでした。にせ教師たちが言っているような姿ではなかったのです。この方こそ、まさにいつも変わらない神様の本質の完全な現れでした。そしてこの方がそのような神様であるからこそ、そのキリストは最高のかしらでもあり、第一のものとしてほめたたえられるべき偉大な存在でもあったのです。

そのすばらしいお方は、同時にすばらしいことをも成されたお方でした。もう一度20節を見ていただくとこのように記されています。「その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」ここでパウロは何を言わんとしたのでしょうか？鍵になるのは「和解させてくださった」と訳され

ていた「和解」ということばです。二度にわたって登場していたこの「和解」ということばには、もともと「変化」という意味が含まれていました。変わるということです。変化です。そしてここから「敵意が友情に変わる」とか「壊れた関係を修復する」といったかたちで用いられたりするのです。敵意が友情に変わる。敵だったものが友に変わるのです。壊れていた関係が修復されるのです。かつて敵対関係にあったような者たちが和解して、互いの間に平和を築くようになるのです。そしてこれこそ、もう皆さんもよくご存じの通り、私たちと神様との間に起こったことでもありました。みことばははっきりと言うのです。来週このことに関して、もう少し詳しく見ていきますが、続く21節にもパウロはこう記していました。「あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあつたのですが、」私たちはみな、以前は神様の敵として歩んでいたのだと。例外はひとりとしていませんでした。本来ならば、すべての人が神様の栄光を現す者として造られたにもかかわらず、その創造主に従おうとはしませんでした。いや、そればかりかみずからの意志を持ってこの方を拒み、ただ罪に罪を重ねていたのです。ほかのだれでもない私たち自身が、御怒りを積み上げていました。だからこそ、そんな私たちに値したのは、当然、神様からの正しい義なる永遠のさばきでしかなかったのです。私たちの側からこの関係を修復することはできませんでした。しかし、そんな敵として歩んでいた愚かな私たちに対して、神様が手を差し伸べてくださったのです。壊れてしまった関係を修復したのは私たちではありません。壊れてしまった関係を、御子の十字架の血によって神様が修復してくださったのです。ほかの箇所でもパウロはこのように言っていました。ローマ5：1に「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」また飛んで10節にもこう書いています。「もし敵であつた私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」と。こうしてただあわれみのゆえに、私たちは神様と和解することが赦されたのです。

でもここでパウロは単に、私たちだけを和解させてくださった、とは言っていない。20節をよく見てみるとこう記されていますね。「御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。」と。「万物」とありました。パウロが言わんとしたのは何なのかをよく考えてください。これを正しく考えないと異端に走ってしまうことにも繋がります。実際に、ある人たちはこの箇所を読んで、すべての人が最後には御子によって和解することができるのだ、すべての人が最後には例外なく救われて天国に行くことができるのだと考えたり教えていたりするのです。すべてのものは最終的には救われるというそんな教えをしていたりするのです。もちろん聖書全体を見てもそのようなものを見て取ることはできませんし、当然そのようなことをパウロが教えていたのでもありません。

では、いったい「万物」とは何を表しているのでしょうか？ポイントはここでパウロが「和解させてください」と口にしたとき、彼は人に限定してこの話をしていたのではなかったということです。少し混乱するかもしれませんがよく考えてください。20節の続きを見ていただくとうこう書いてあります。「地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」と。「地にあるものも天にあるものも」とありました。さて皆さん気づくでしょうか？これと同じことばがどこかで使われていませんでした？パウロは同じ表現を16節で使っていました。「なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、…」と。私たちが16節を学ぶときに考えたことですが、そこではパウロが、御子は万物を、地にあるものも天にあるものもすべてを造ったお方なのだと教えていました。この世界のすべてのものは、ほかのだれでもない御子によって創造されたのです。キリストの創造のみわざには、確かにすべてのものが含まれていました。この方のそのみわざには、限界値などなかったのです。そしてこれと同じように、「御子は、万物を、地にあるものも天にあるものもすべてを和解させてくださる」と言われていました。つまりキリストの和解のみわざにも、同じように人だけではなくすべての被造物が含まれるということです。この方のみわざには限界値はないということです。すべてに

まさる偉大な主は、罪によって壊れてしまった神様とすべての被造物との関係さえ、元に戻されるというわけです。そしてその日がやって来ることを被造物自体も待ち望んでいるのです。ローマ8：19-21にこう書いています。「:19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」と。この世界に罪が入った結果、人はみな死ぬようになりました。またそれは人だけではなく、動物や植物も魚も鳥もみな死ぬようになりました。罪に汚染された世界にあっては、病も災害も争いも絶えず起きています。最初に神様が創造された世界にはそのようなものはありませんでした。でもその完璧なものが罪によって壊れてしまったのです。今は正常ではないということです。でも皆さん、そのすべてが修復される日がやって来るのです。死に勝利してよみがえり、今も生きておられるその御子によってすべてが新しくされる日が必ずやって来るということです。いつまでも罪や悪が続くものではありません。終わりがやって来ます。例外なくすべてのものがすべてにまさる偉大なお方の前に、ひざをかがめる日がいつの日かやって来るのです。ピリピ2：10-11に「:10 …イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」と書かれています。もちろんこのようにひざをかがめる者の中で、喜んでそれをする者も、喜んでそれをしない者もいます。主を今も憎んでいて、逆らって歩んでいる者たちも必ずこの方の前にひざをかがめへりくだる日はやって来るのです。そして、その日その時、自分の選択は間違っていた、と気付くのです。拒み続けていたキリストが、栄光にあふれたすべてにまさるその主であると認める日はやって来ます。その真理は示されても、その者は逆らい続けて滅ぼされていくのです。そして残念ながら、その日に後悔してももう手遅れだということです。

だからこそ、まだ救いが用意されている、きょうというこの日、どうかこのイエス・キリストを信じ受け入れてください。私やあなたのような愚かな罪人のために十字架でその血を流してくださったこの方に救いを求めてください。あなたが心から悔い改めて、この方を信じるなら、自分の主として救い主として受け入れるのであれば、あわれみ深い神様はあなたに救いを与えてくださると約束してくださっています。どうかそれを手にしてください。この救い主をご自分のものとしてください。

またもうすでにこの主に従ってその日が来ることを楽しみにされている皆さん、「イエス・キリストは主です！」と心から賛美するそんな最高の日は確実に近づいています。教会のかしらであり、死からよみがえられた第一のものであり、和解をもたらすすべての主であるそんな偉大なお方にお会いするその喜びの日は、確実に迫っているのです。そうだとするなら、改めて考えてみてください。いったいだれに心を留めて日々を歩んで行こうとするのでしょうか？果たしてキリストはすべてにまさるお方なのだと本当に信じているのでしょうか？この方が自分にとってのすべてなのだと、切り離すことなど絶対にできない自分にとってのかしらなのだと、本当に信じて生きているのでしょうか？

確かに私たちがこのみことばを通して学んできたように、キリストこそ、並ぶもののない権威あるお方でした。すべてにまさる最高のお方でした。そのようなお方に、私たちは揺るがぬ希望をいつも見出すことができるのです。このお方が、私たちとともに歩んでくださると約束してくださったのです。この方にあって私たちはどんなときであろうとも、力を見出すことができ、知恵を見出すことができ、私たちに必要な助けを見出すことができるのです。そうだとするなら、この主に根ざして、この方にふさわしい賛美をささげる者とともに歩んでいきましょう。